

板野中学校 同和教育だより

MY SKY No. 19

マイ・スカイ

2001年1月30日(毎月第1・第3火曜日きまぐれ)発行

発行者

編集・文責

駐吉成正士

副次本知己

さて、ニュースや新聞で大きく取りあげられているように、今年の成人式^{せいじんしき}は全国各地でいろんな騒動^{そうどう}があったようですね。ここ板野ではどうだったでしょうか？ 幸いなことに、地元^じのA I テレビで流れている限りでは、大過なく、厳 肅^{げんしゆく}に行われたようです。

以前、ある保護者がこんなことを話してくれたのを思い出します。

「いろんな所の成人式を見るけど、板野の子やは、他の所^{くら}と比べて、ずいぶん大人^{おとな}っぽいように感じるんです。落ち着いてるっていうか……。もしかしたら、町内の同和教育の取り組みの中でそうになっていったのかなと思うんです。すぐには、子どもらに同和教育の成果^{せい 果}は出んかもしれませんが、何年か経^たってじわじわ出てくるようにも思えるんです。やっぱり長い目で見なあきませんねえ。」

これを聞いて、「ああ、なるほどなあ……」と思いました。私たち板中の教員は、どちらかと言えば中学校3年間しか見えていません。でも、保護者や町内の方々はずっと見てるんですよね。その言葉は重いものです。保護者の言うことがそうだとしたら、私としては本当に嬉しい限りです。

力でねじ伏せられるのではなく、ねばり強く対話^{たいわ}を続けるから、信頼関係^{しんらいかんけい}が生まれる。人の良い個性^{こせい}を見つめようとするから、愛おしくなる。人から愛^{あい}を感じるから、他人^{たにん}にも優しくなれる。そんな経験を小・中と続けていけば、全国各地で起きているムチャクチャな成人式にはならないように思えるのです。若者としての元気さもいいですが、出す方向を間違えない元気さであってほしいと願います。

▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

♪# 新・ひとり・ジグツ ♪

◆一番上^{かく}の枠の中を見てもらえば分かるように、今日は第5火曜日ですから、マイスカイは発行しないはずなのですが、連載^{れんさい}中の「女性たちの『生きる』闘い」が①から最終回まで5話あるので、今回だけ特集号として発行することにしました。あしからず……。ちなみに、ページにそって読んでくださいね。

女性たちの

「生きる」闘い ②

中学校時代

（何もわからない先生たち）

中学生になった彼女は、差別と正面から立ち向かう生き方を積極的に選んでいる。小学生の頃から悩み続けてきた差別から逃げるのではなく、真つ向から立ち向かうと決心する。そして、「闘う」というメッセージを、周囲に表現しようとする。

しかし、当時の先生たちには、差別と闘おうとする彼女の決意は、なかなか受け入れられなかった。

「班ノートというのがあって、クラスの班のなかで順番に書くんだけど、私は、最初に書いたんです。『私は部落出身だから、解放運動をします』って。……そしたら、いつの間にかノートが、新しくなってるんです。それで、『何で』と思って先生に聞きました。『まだ、言うのは早いから、部落じゃいうて言うてもええんか』いうて、『お前、部落じゃいうて、差別されたらどうするんか』って先生が言うから、あんたに言われる筋合いじゃないわって言うたんじゃけど。」

彼女が、先生にそう抗議した後、先生の態度は変わらない。彼女が差別について書くたびに、班ノートは新しくなったとい

う。そんなことを3、4回繰り返すうちに、先生も諦めたように彼女の話を耳を傾け始める。

「さすがに先生も、この子は言うて聞くような子でもじゃないと思つたらしくて、先生が、クラスの中で解放宣言をすることについて言うたんです。」

解放宣言というのとは聞かぬが、実際は、クラスの中で彼女が、自分は地区出身であるということを一方向的に語らせただけのものだった。一種の「さしし者」になりかねない雰囲気だった、という。

何故ひとは差別をするのか。クラスメートの一人一人が、自分や自分の回りにある差別性を見つめたり、彼女と一緒に差別と闘うためにはどうすればいいの、を話し合つたりするような人権学習の場ではなかった。

（同情なんていらぬ）

彼女の解放宣言の後で、先生は、クラス全員に感想文を書かせた。いまでも、その時のことをはっきり覚えてる。

「みんなの感想文を先生からみせられた時がつくりしました。あの当時40人学級で、一人の子を除いては、後は全員同じような意見でした。……『Aさんは部落なのに頑張ってる。Aさんはかわいそうだけど頑張ってる。欲しい』ってね。何これって思いました。」

「出身宣言」をみんなの前で行った時、その声も足も震えたという。自分の家のこと、父親のことを人前で話すという事は、彼女にとつて、好き好んで言いたくなるような中身の話ではない。

だけど、これを言わなければ、自分の抱えている部落差別の現実をみんなにさらけ出さなくては、差別について語れない。自分が自分のしんどさを語ることを通して、少しでもクラスのみんなが部落差別について考えてくれれば……。

中学生の彼女は必死で考え、話した。しかし、彼女が話し終えた時のクラスの反応は、「Aさんはかわいそう」という同情のまなざしでしかなかった。

その中で、一人だけ「私も一緒に頑張る」と書いてくれた子がいたという。その子は小さいころの事故が原因で手に障害を持つ子どもだった。

「その子だけです、たった一人だけ、私も一緒に頑張るって書いてくれて。もう、うれしくて、ほんとに。」

彼女は、このたった一人だけの理解者を突破口にして、回りの子どもたちに積極的に働きかけていく。回りの子に、自分が隣保館に行つて「解放子ども会」の活動をしていることの意味を話していった。「解放子ども会」に行くことは、特別のことじゃない。みんなが習い事に行くのと同じこととして受け止めて欲しい。彼女は、そう言

つて仲の良い子に話していった。

「仲のいい子に少しづつ話をしている。で、何人かは、わかってきてるんですよ。友達が『今日遊ぼうや』言うて、『私、今日解放子ども会に行くんよ』、『ああ、そうなん。じゃあ、がんばってね』って。そう特別のことじゃなくて普通に話が出来るようになって。」

こうして彼女は、自分の力で回りを変えていった。しかし、先生の側は、ほとんど何も変わらなかった。少なくとも、彼女の目には、そう映つた。

「先生が私ら部落の子を集める時『特別委員会の人、宿直室までおいで下さい』って放送するんですよ。で、行つてみれば、宿直室でわざわざカーテン開けて『ここに来るのに誰にも見られんかったか』って。私ら犯罪者じゃないんだから……。」

回りの友達には、彼女の生き方を少しづつ受け止め始めていた。その一方で、教師たちは自分の中にある「部落」のイメージを彼女に押しつけた。「部落はきつい、しんどい」という悲惨なイメージである。そのことのしんどさは、教師には、想像出来なかったようだ。

「私を受け止めてくれる子が回りにいたことに、すごく感謝してるんです。でも、それが先生たちには、どうしても、なぜかわかってもらえなくて。私が何か言うて、どうしても、きつい、しんどいって目で見ら

れる。何でわからんのだろうと思つてはがゆくて、はがゆくて。」

この先生、決して悪気があつたわけではない。解放子ども会の活動をどちらかといえば理解している方の先生だった。

しかし、残念ながらその理解のある先生でも、彼女に言わせれば、回りの子どもたちの受け止め方よりもはるかに速い形での対応しか出来ていなかった、という。

〈父との離別〉

そんな中学校生活を送っていた彼女が三年生になった時、父親と母親は離婚した。その時のことを彼女は振り返って語る。

「父親にわからないようにして、ちよつとづつ荷物を出していった。母と一緒に家を出ました。市営住宅に引っ越したんです。そこに来た時、『わー、ゆっくり寝れるね』って、『うるさくないわ』って。すごく、ほっとしたんですよ。もう、涙が出てうれしくて、うれしくて。」

お酒を飲んで暴れる父親は、もう、彼女たちの手に負える状態ではなかった。

両親の離婚を「喜ぶ」中学生。このことだけからも、彼女の伝えたいメッセージの凄まじさが想像できる。父親と、もうこれ以上暮らせない。父親と母親の離婚は、この家族にとって、家族が生きていくための選択肢だった。

しかし、そのギリギリの選択をめぐって

教師は、またもや彼女を追いつめ、傷つけてしまう。教師不信の思い出を語る。

「『お前は、お父さんを捨てるのか』って先生に言われたんです。『血のつながってるお父さんを捨てるんか』って。家庭訪問に来て、家の中の事知つてはる先生の言つたんです。もう、すごく悔しかった……。」

彼女に、こう言葉を投げつけた教師は、地域進出という名の元に何度も家にきている。いわゆる同和主担の先生だった。彼女の家庭の事情は、わかりすぎるくらいわかつていたはずだった。にもかかわらず、現実には両親が離婚したことをめぐって、彼女にこう言つたという。さらに彼女を傷つけた、まさにとどめの言葉がある。

「『お前は、差別から逃げるんか。お母さんに離婚するなって言うてこい。』先生にこう言われた時、私ら親子に死ねって言われている。そんな気がしました。」

彼女たち親子がここまで追いつめられてきた事情に、この教師自身、全く気がついていない。その上、「解つてもいない」のに「解つたような顔をして」説教までしようとする。この教師の差別の現実を捉えられないズレ方の凄まじさが、彼女の中に強烈に残つた。彼女が教師に幻想を抱けなくなつた決定的出来事である。

さらに、「解放子ども会」の中でも、彼女は孤立していった。両親の離婚について、

彼女は子ども会で話をしたが、当時の子ども会のメンバーの中に、彼女の家庭環境の凄まじさを想像出来るだけの子どもは、いなかった。この彼女の事情を想像できなかった、周りの地区の子ども達の問題ではない。彼女の体験が、それほど厳しいものだった、ということであろう。

しかしその事は、彼女にとって何ともいわれぬ孤立感を深める結果になつてしまつた。

「子ども会みんなに話した時、やっぱりわかつてるようで、わかつてもらつてなかったんだってことが見えてきて。私の話を聞いて、『お父さん、洗濯しよつちやつたよ』とか『仕事行きよつちやつたよ』って言うてくるんですよ、友達が。誰もわかつてくれなかつたんですよ。」

当時の「解放子ども会」のメンバーに、彼女の家庭の中の差別の厳しさを伝えることは難しかったに違いない。

家庭の中で繰り広げられる差別。この体験は、さすがに希なケースであつたろう。

高校時代

（もう、誰も信じられない）

小学校時代、中学校時代とさまざまな差別に出会ってきた。その度に彼女は、差別と闘うという選択肢を選び続けた。しかし、

高校に入った頃から、彼女の生きるスタイルは、「闘い」から「逃げ」へと変化し始

める。

「高校に入ってから、先生も私の好きにさせてくれて。すごく居心地がよくなつたんです。解放運動のほうも、最初は高校生の会に入つて、最初はそれなりに燃えてる自分がいたんですよ。でも、ある時、小学校から同じ解放子ども会にきていた子が『あんたは、うちとちごうて、あんな家だから運動出来るんよ』って言うたんです。私には、その子の言葉が、自分でも意外なほどショックだったんです。」

それまで、どんなことがあつても、解放運動だけは続けてきた彼女だった。運動することは、彼女にとって「生きること」そのものだった。

そして、彼女が何よりも信じて大切にしてきたものは、同じ部落の仲間だった。彼女にとってその子の一言は、信じてきた仲間から裏切られたことを意味した。自分は今までそんなふうに見られていたんだ。そう思うと無性に苦しくなつた。

「最初の『友の会』でそんなことがあつてもう、どうでもいいやつていう気になつちやつて……。それから、『友の会』より学校の友達と遊ぶほうが楽しくなつて、逃げたんですよ、私。」

〈何もかもイヤ〉

母親は、彼女が高校生になつた頃から、生活の為にスナックに勤めるようになった。

真夜中まで働いて明け方に家に帰って来る。そんな母親の生活と学校に通う彼女の生活とは、だんだんとずれ違ひが多くなつていった。母が、家を開けることも度々あった。ひどい時は、一週間も家に帰らない。お金がなくて学校に持つて行く実習費を持つていけない時もあつた。そんな時彼女は、バスに乗り祖父母に小遣いをもらいに行つた。しかし、そんな生活にだんだん彼女は疲れ果ててしまう。

「お金もくれん。ご飯も作ってくれん。何が親よって、そう思ひだしたんです。そうこうしてたら、家に母親の彼氏が来たりして。私も多感な時だったし、すこいやじやったんです。」

母親も女であることを頭でわかつてはいても、高校生生の彼女には、母親が、女である前に「自分の母親」として、いて欲しかったのだらう。しかし、彼女の母親は、なにもとおおらかな、そして、自分というものに対して真正直に生きるタイプの人だった。女としての自分を認めたがらない娘を尻目に、母親は、自由にそしてしたたかに自分流のやり方で部落差別と闘ひながら生きた。

しかし、そのことは、当時の彼女には、とうてい理解できず、相当なストレスを溜めていくことになる。

「もう、家もいや。『友の会』もいや。解放運動の話をするのもいや。そんなこんな

で、ご飯もろくに食べないから体の調子も悪くなつてきて。だんだん学校に行くのにもたいぎくなくなつて、登校拒否みたいになつて。もう、何もかもがイヤになつていったんです。」

《友達だけがわかつてくれた》

心理的なストレスが溜る毎日を送る彼女にとつて、唯一の救いは、学校の友達だった。

「その日その日でしんどかったから、朝起きたら頭が痛いんですよ、必ず。そしてどうしてもしんどいけえ休んでしまふ。そして、今度は些細な事が気になつて、制服に一本斜めにシワがあつたら、もう、学校に行けんって思ふんです。ノートが切れた、もう学校に行けん。そんなくだらない事がすこく気になり出して。」

学校に行つたり行かなかつたりの生活になつていった。それでも学校の友達だけは、彼女のことをいつも心配してくれていたという。当時、彼女には8人くらい仲のいい友達がいいた。その友達がかわるがわる彼女の家に遊びに来ては、彼女一人の家に泊まつてくれたりした。夜は夜で、毎晩電話をかけてくれる。そんな生活が半年くらい続いたという。

「友達がいいたから支えられたなつて思ひます。かなり、半年くらいは、みんなに迷惑かけたんだけど、自分でもだいぶスッキリ

したなつていう時期が来て、学校でも行つてみようかなつていう気持ちになれたんです。」

《母との葛藤》

学校に再び通うようになったAさん。彼女は、母親の生き方を自分なりに認めて行こうと努力した。学校が休みの時は、ヒマつぶしに母親の店を手伝うようにもなつていく。母親への共感も持つようになつた。

「周囲で、『離婚して飲み屋なんかして』つて陰口言われても、私は『それがどうしたんよ』つていう気持ちでした。お母さんの店を手伝つてゐる時は、気分も晴れるんです。何も考えなくてもいいから。ああ、お母さん頑張つてるとか、しんどいんだとかかわかんんです。やっぱりどこかで、自分のために働いてくれてるつていう意識があるから。」

働いている母の姿を通して、母親の「なま」の生きざまに触れていく。そのことは、日々の母親への不満を彼女から忘れさせた。しかし、その一方で彼女の中には、生きることに精一杯の母親を受けとめられない、母の生き方に反発するもう一人の自分もいた。

そんな高校時代。彼女は、解放運動から少しずつ遠ざかつて行つた。

第二ステージ：結婚差別

彼との出会い

《気にしないなんて言わせない》

Aさんは、21才の時結婚した。彼女の夫は、地区外である。

二人の結婚は、決してスムーズには進まなかつた。彼女の前には、またもや部落差別が大きく立ちちはだかつていた。彼の実家による結婚差別である。

「彼の実家に行つて、両親に紹介されました。その時、『あんたが部落じやいことばわたら、気にしないことにするから』つて言われたんです。」

彼女の夫の実家のある地域と、彼女の生まれた部落とは、同じ学区内である。二つの地域は、隣接している。彼の両親は、彼女の生まれた被差別部落に対して、根強い差別意識を持ち続けていた。

両親が言った言葉。「部落だということには気にしないことにする。」その言葉の裏に潜む部落差別を、彼女は見逃さなかつた。「彼の両親が『気にしない』つて言うた言葉の中に『気にしない』つて、私にわざわざ言わにやいけんほど、気にしてたんだと思ひました。だつて、そうでしょ。本当に気にしてないんなら、わざわざ、私が一番気にしてゐることをそれも初めて会つた時に、言う必要はないでしょう。」

彼女を傷つけた彼の両親の言葉は、これだけではなかつた。

「結婚する前に子どもが出来てて。そのこ

とも彼が両親に話をしました。そうしたら、『この子は、本当に息子の子かねえ』って、そう言われました。もう、そこまで言うの
かって……。ショックでした。」

さすがに、この時ばかりは、彼と結婚することを締めようとしたという。子どもは、彼女一人で産んで、育てることを考えていた。なにより、自分だけでなく、産まれて来る子どもまでも差別されたような気になった。彼の両親を許せなかった。

「私自身、あそこまで言われて、どうして結婚せにやいけんのかって思いました。彼に『あんなイヤなこと言う両親のいる家とは、結婚なんか出来ん』って言いました。彼は『そういう意味じゃなくて……。』って必死でごまかしてましたけど。」

〈親戚も反対する〉

二人の結婚に反対したのは、彼の両親だけではなく、親戚もまた彼女が部落出身であることを理由に、二人の結婚に反対していた。

「『わざわざ、部落の嫁をもらわんでも』ってロコツでしたよ、彼の親戚も。私に会っても、挨拶してもらえませんでしたから……。』」

彼の両親だけではなく、親戚からもロコツな部落差別を受けた。しかし、彼女は、彼に部落差別を二人で乗り越えてゆくように問い続けた。

次号につづく

